

君が何度死んでも

梶本孝思 Takashi Sugimoto



アルファポリス文庫

人生は自転車のようなもの、と言った人がいた。
倒れないようにするには、走り続けるしかないという意味だそうだ。
人生はマツチ箱のようなもの、と言った人もいた。
重大に扱うのはバカバカしいが、重大に扱わないと危険だという意味だそうだ。

芝居しばいのようなものと言った人もいた。

重い荷物を背負って遠くへ行くようなものと言った人もいた。

川の流れるようなものと言った人もいた。

タマネギのようなものと言った人もいた。

誰もが何かに置き換えて、みんなに何かと言いたがる。

結局、人生は何とでも言えるものなのだろう。

人生は、エレベーターのようなものだと思う。
上がることもあれば、下がることもある。

目的の階まで一気に進むこともあれば、一階ごとに止まってドアが開くこともある。
知らない誰かが乗り込んで、一緒に行くこともある。

親しい誰かと途中の階で、別れてしまうこともある。

そして、最初に階数ボタンを押した時から、既に行き先は決まっているのだ。

七月七日の日曜日。今にも雨が降り出しそうな、薄灰色の午後二時だった。

市内を巡るバスは病院の前に停車すると、短いブザーとともにドアを開ける。

湿気を含んだ生温い外の風が入り込むのを感じて席を立つが、他に降りる者は誰もいなかった。

すぐ近くの通用門から病院の敷地へ入ると、チャコールグレーの広い駐車場を右手にアスファルトの歩道が伸びている。

その奥に見える建物の、四角い消しゴムを組み合わせたような外観も、白黒二色のモノトーンな景色を印象づけていた。

色の少ない世界だった。

色そのものは同じでも、見えかたは体調や感情によって変化する。

隣に愛する人がいれば、雨の中でも周りは色鮮やかに映る。

でも、病院に向かって一人で歩いていけば、そうはならない。

曇り空がそのまま心に影を落としていた。

休診日の今日は正面玄関が閉鎖されているので、裏手へと回り時間外入口から院内へと入る。

外来患者のいない一階は外よりもさらに暗く、一直線の廊下は奥で暗闇に吞まれていた。

受付で渡されたストラップ付きの面会許可証を首から提げて、廊下の途中で角を曲がりエレベーターホールに着く。

手術用、搬入用ではなく、一般用と書かれたドアの前で呼び出しボタンを押して、箱の到着を待った。

ドアが開くと中年の男が、老婆を乗せた車椅子を引いて、うしろ歩きで箱から出てきた。男がこちらに向かって会釈する。

短く刈り込んだ白髪まじりの頭に、老いと介護の疲れが強く感じられた。老婆は眠っているのか、もうあまり起きていないのか。車椅子を引く振動に合わせて、うつむいた頭がぐらぐらと揺れていた。きっと母と息子なのだろう。少し上を向いた鼻の形がそっくりだった。

二人と入れ替わりにエレベーターへと乗り込んで、右手の操作盤から『5』と表示されたボタンを押す。

ごん、と病院ならではの遅い動作でドアが閉まると、重い音を立てて箱が上昇を始めた。

背筋を伸ばして、顎を上げて、ドアの上部にある階数ランプが進むさまを見つめる。あとはもう、立ち尽くして待つばかりだった。

市岡守琉は、病院の匂いが嫌いだった。

ところどころに汚れと傷が見える白い壁、温かみのない昼白色の照明、慌ただしく歩く医師や看護師。

外よりも大人しく神妙な顔つきの若者たち、勝手知ったる他人の家のように我が物顔の老人たち、推理小説の最初のページにあるような、不自然に入り組んだ小部屋に分け

られた院内の見取り図。

多くの見慣れない科目を示した誘導サイン、壁に貼られた厚生労働省からの案内や、地域の医療センターからのお知らせ、警察による高齢者詐欺への注意喚起ポスター。

院内に漂う消毒液の匂い、プールの塩素とオキシドールを混ぜたような、鼻を突く刺激臭、洗いたてのシーツのような洗剤と布の匂い、隠しきれず、かすかに届く汚物の匂い。

そして、多くの病と死の匂い。それらをまとめ、病院の匂いと呼んでいる。

鼻で感じるものだけではない。

目に映る光景、耳に届く音、通りがかる人々までも含まれている。

雰囲気と呼ぶと掴みどころのない気配のように思えるから、やはり匂いと呼ぶのが相応しかった。

病院の匂いは、異世界の匂いだった。

大きな怪我をして痛い思いをしたとか、大病を患って苦しい思いをしたから嫌になつたのではない。

むしろ逆に、馴染みがない場所ゆえに、いつも強い違和感を覚えていた。

二一年の人生で、病院を訪れた機会は数えるほどしかない。

赤子の頃は知らないが、記憶にあるのは、小学一年生の秋に高所から落ちて左膝を縫った時と、中学三年生の夏に傷んだ牛乳を飲んで当たった時の二回だけ。学校の保健室へも、定期的な予防接種と身体測定以外には入ったこともなかった。

——こいつは俺に似て頑丈だからよ。

ふと、かつて聞いた父の声が頭に響く。

小学四年生の冬、インフルエンザが流行して学級閉鎖になった朝。

隣家のおじさんから、マー君は風邪もひかずに元気だね、と褒められたあとの返事だった。

忘れずにいるのは、その言葉に大きなショックを受けたからだ。

父に似ている。

それはお前も大人になると、太ってだらしがなくなって、顔も浅黒く脂ぎって、口や鼻から臭いタバコの煙を吐いて、酒を飲んで人や物に当たり散らす男になるぞと宣告されたように思えた。

父がどこか得意気で、髭だらけの顔に照れたような笑みを浮かべていたのも覚えてる。

この人は何がそんなに嬉しいのか、小学生に分かるはずもない。

ただ、それは父との感性の違いに気づいた最初の出来事だった。

エレベーターが五階に到着する。

消化器内科病棟は明るく人の姿も多い。

日曜日の面会時間は、病院という場に気を遣いながらも、賑やかな声が飛び交っていた。

生死という、希望と絶望が入り混じって社交ダンスに興じる場。

それもまた病院の匂いの一つだろう。

廊下を進んで三つ目の病室に入る。

六人部屋は他に見舞いの者もおらず静かだった。

外出しているのか、手前両側のベッドには入院患者の姿もない。

それを横目に奥へと進むと、窓際左側のベッドを囲む薄緑色のカーテンをそっと開いた。

白い柵付きのベッドには、父が枯れ木のように横たわっていた。

上半身をわずかに起こしたベッドの上で、こちらを出迎えるように顔を向けている。

しかし両目は閉じた線になっており、昼寝中の穏やかな呼吸音が聞こえていた。五一歳とは思えないほど老け込んだ顔をしている。頭髮の減った頭と瘦けた頬からは頭蓋骨が透けて見えるようだ。両鼻から両耳へかけて酸素吸入用の細い透明のチューブが渡っている。掛け布団から出た左腕にも、肘に点滴の針が刺さっていた。

——マー君！ 親父さんが『酔春』で倒れたぞ！

三日前の深夜。電話を取るなり慌てた口調でそう告げられた。かけてきたのは、実家の隣に住む小中学校時代の同級生。

風邪もひかずに元気だねと褒めてくれたおじさんの息子だった。久しく会っていないかったが、電話番号を長く変えずに使い続けていたので連絡が取れたようだ。

『酔春』というのは地元の繁華街に古くからある居酒屋で、近所の者なら誰でも知っている店だ。

父はそこで酒を飲んでいるうちに意識を失ったらしく、単なる酔い潰れではないと気づいた顔馴染みの店主が、慌てて救急車を呼んでくれたそうだ。

病床に眠る父をそのままに、側に置かれた籠から使い終わったタオルと下着を回収して、洗い替えのパジャマとタオルに交換する。

ベッドの柵に付けられた『市岡新太郎様』というネームプレートを見て、父の名前を改めて心に留めた。

居酒屋で倒れたのは不幸中の幸いだろう。

一人で暮らす実家なら二、三日は誰にも発見されなかったはずだ。

あの日、ほどなくして病院で意識を取り戻した父は、目の前の医師と居酒屋のおかみさんに向かつて、悪い悪い、ちよつと飲み過ぎたなど、頭を掻いて苦笑いした。

もちろん、それで場が和むはずもない。

冷めた雰囲気のまま、側に立つこちらには目を合わせようとしなかった。

そして翌日に再び目を覚ました父は、早速家に帰ろうとして看護師たちを困らせたらしい。

息子にも近い歳の者たちを相手に押し問答をしていたが、やがて体力の衰えを思い知ったらしく、再びベッドに戻っては苦痛にもがき耐えていたそうだ。

そんな話を笑顔の看護師たちから聞かされた。

父がご迷惑をおかけして……と謝らざるを得ない理不尽さに苛立った。

——アルコール性の慢性肝炎、肝硬変の疑いもありそうです。

横分けの白髪頭に口髭をたくわえた初老の医師からそう告げられても、全く驚かなかつた。

頑丈さを自慢にしていた父の体が壊れるとすれば、まずそこしかないと考えていたからだ。

肝臓は体に取り込んだ糖や蛋白質や脂肪などを溜めてエネルギーにする機能と、アルコールやアンモニアなどの有害な物質を分解して排出する機能がある。

その肝臓が弱ると体にエネルギーが供給されなくなり、有害な物質も分解されず体内に蓄積されるのだ。

結果、栄養不足になって体が弱り、血液も濁って酸素不足に陥る。

肌や目の白い部分が黄色くなって、腹に水が溜まって、意識も混濁するそうだ。

肝臓が弱る要因は、先天性の場合も含めて複数あるが、父のケースは明らかに過度の飲酒によるアルコールの影響だった。

長年にわたり身体の処理能力を超える量を摂り続けてきたせいで、肝臓は絶えず炎症を起こし続けていた。

肌や喉のかぶれなら小さなものでも気になるが、肝臓の炎症は重症化するまで自覚症

状がほとんどない。

不調を感じた時点で既に病状はかなり進行しており、倒れたとなると取り返しのつかない事態が想像できた。

そして肝硬変とは、その取り返しのつかない事態を示す病名だ。

炎症を起こし続けていた部位が、ついに固まり完全に機能しなくなることだ。

こうなると、もう飲酒を止めても回復しない。

手術で硬化した部分を切り取って、残りの部分だけで生き延びるか、それも無理なら他人の肝臓を移植してもらおうしかないだろう。

どちらも極めてリスクの高い処置になる。

そして今の父には、手術に耐えられるほどの体力はなかった。

——こんなになるまで、どうして放っておいたんだ！

がんがんと、頭の中で声が響く。

医師の発言ではない。守琉自身の思いだった。

自業自得と言うのは簡単だ。

誰も酒を飲めと強要していない。

漏斗を口に突っ込んで、無理矢理に流し込んだわけではない。

自らの意思で酒を飲み、良くないことだと知りつつも飲み続けて、予想通りに体を壊したのだ。

そう、予想通りだった。

誰もがこうなると分かっていた。

それなのに酒を断たせようとはしなかった。

気づいていながらも、結局は壊れてゆく父を見放したのだ。

たった一人の身内ですらも。

「……早く行かないと、間に合わなくなる」

ふと、父が苦しそうな寝言を言っ顔をしかめる。

呼吸が乱れて上下する胸の速度がわずかに速まった。

守琉は体を固めてじっと様子を窺う。

起すべきか、ナースコールを押すべきか。

だがすぐに呼吸は落ち着き、表情もほっとしたように弛緩した。

酒焼けと黄疸の混じった顔色は、葬式で見る遺体よりも体調が悪そうに見える。

これでもいくらか持ち直したと医師が言っていた。

早く行かないと、間に合わなくなる。

今、父はそう言った。

今さらどこへ行くのか、何に間に合わなくなるのか。

何か悪い夢でも見たのだろうか。

しかし、この現実以上に悪い夢などあるのだろうか。

取り替えたタオルと下着の入った紙袋を持ち上げると、足音を立てずにベッドから離れて病室を出る。

寝付いている父をわざわざ起こす必要はない、というのは自分への言い訳に過ぎない。本当は、顔を合せて会話するのを避けていた。

来た時と同じ廊下を引き返して、エレベーターの箱に入ると、今度は「1」と表示されたボタンを押す。

ごとん、とドアが閉まって箱が下降する。

父との距離が再び遠ざかっていった。

肝硬変とは象徴的だ。

日々痛めつけていると患部は炎症を起こし、それでも刺激を繰り返していると、やがて凝り固まって取り返しがつかなくなる。

親子のこじれた関係も、それと同じようなものだろう。

小さな諍いや行き違いで傷つけあって、いつの間にか修復できないほど壊れてしまう。治療法はあるのだろうか。

切り取って、捨ててしまう以外に。

ドアが開くと一階に到着している。

階数のボタンを押した時から決まっていた未来。

廊下を戻って面会許可証を返却して病院の外へ出る。

モノトーンの景色は、来た時と何も変わっていないかった。

2

「お久しぶりです、市岡さん」

水尾香苗は喫茶店の端の席で、目の前の男に向かってそう言う。

「ああ、いきなり呼び出してすまない、香苗さん。迷惑だったか？」

市岡新太郎は落ち窪んだ目を大きくさせると、若い女を睨め回すように視線を動かしつつ席に着いた。

年が明けて間もない一月中旬、冬空が澄み渡る午後。

店内は小綺麗で趣のある、昔ながらのコーヒESHOPPだった。

オレンジ色の照明にレンガ模様の壁、艶のあるマホガニーのテーブルを広めに並べて、座面の赤いアンティーク調の椅子を置いている。

店は住宅街にあるせいか慌ただしさもなく、客も香苗の他には三組しかいない。

天井近くに据え付けられたスピーカーからは、緩やかなジャズが静かに流れていた。

「元氣そうだな、香苗さん。こうして会うのも、いつぶりになるかな」

市岡は頭にハンチング帽を被り、顔に丸眼鏡を掛けて、白髪交じりの口髭を生やしている。

背はそれなりに高いが痩せており、身に着けた焦げ茶色の古いスーツを持って余していた。

「前に会ったのは一昨年の冬でした。この店の、同じ席で」

香苗は伏し目がちの顔に気弱そうな笑みをたたえる。長い黒髪が顔の横を流れた。白いニットにチェックのスカートを身に着けて、青色のシオルダーバッグを膝の上に載せている。

テーブルの上の両手は、まるで大切な物を扱うかのように、ストレートティーの入ったカップを包んでいた。

「もうそんな前になるのか。近頃は一年も二年も早く感じられる」

「私は、随分と間が開いたように感じていました」

「このまま会うこともないと思っていた？」

「そんな、思うはずがありません」

「どっちでもいいさ。あんたを見るとな、年月が経っているのがよく分かる。会う度に大きくなっているからな」

「でも私、もう一九歳だから、子どもの時と違って、そんなに成長してはいないと思えますけど」

「そんなことないさ。俺には分かるんだ。大人っぽくて、ますます美人になってきた」

市岡はにやりと笑ってコーヒを一口飲む。

香苗は上目遣いで市岡をじっと見つめていた。

「市岡さんは、少し痩せましたか？」

「そうか？ 外が寒くて顔が縮こまっているだけだろ」

「ご飯、ちゃんと食べていますか？」

「心配されなくても、それくらいの金はあるさ」

「いえ、そういう意味じゃなくて。体調があまり良くないように見えたので」

「……いや、全然問題ないな」

市岡は顔を伏せて苦笑いすると、スーツに隠れた細い右腕を持ち上げて力こぶを作る真似を見せた。

「痩せたと言っても前が太り過ぎていたんだ。今はすこぶる快調だ」

「それなら、いいんですけど」

「居酒屋の親父からも痩せる痩せると言われて、いざ痩せたら体を壊したのか、大丈夫かって言われる。全く余計なお世話だ」

「そんなつもりじゃ……」

香苗は口籠もって頭を下げる。市岡は話題を打ち切るように膝を叩いた。

「俺のことより、香苗さんのほうはどうだ？ 一九歳ならもう高校は卒業したな？」

「今は短大に通っています。食物栄養学科です」

「まだ勉強するのか。大したもんだ。食物栄養学科って何だ？ 食べ物や栄養の勉強か？」

「そうです。食品の栄養管理や衛生管理の勉強とか、農業や医療に関する授業もあります。他にお料理も習っています」

「料理か。じゃあ将来は料理人か？」

「まだ決めていません。お店の料理人もいいですけど、管理栄養士の資格を取れば病院や介護施設でも働けるかなと」

「色々と考えているんだな。学校は楽しいか？」

「はい。覚えることが多くて大変ですけど、新鮮で勉強になります。私、とにかく何か手に職を付けたいと思っっているんです」

「何でも身に付けておけばいい。それに料理ができれば食いつぶぐれずに済む。なにせ自分で作ればいいんだからな」

市岡は視線を逸らして鼻で笑う。香苗も眉をひそめたまま微笑み返した。

「まあ精々、頑張るんだな。料理人でも病院でも、香苗さんなら大丈夫だろう」

「ありがとうございます……あの、今度、市岡さんにご飯を作って来てもいいですか？」

「いらないよ、そんなの」

「でも……」

「差し出がましい真似はするな。あんたは他に沢山やることがあるはずだ」

市岡は窓に目を向ける。石畳の広い歩道は、夕刻に近づくにつれて人通りが増え始め

ている。

うばぐるま

乳母車を押す若い母親、下校途中の女子生徒たち、携帯電話を手にした女性会社員のあとを、買い物袋を提げた老婆がゆつくりと歩いている。

「……学校に行って、仕事のことも考えていて、よくやっているよ。飯を作りたければ家の両親に食わせてやれ」

「そう、ですね……」

香苗は少しうつむいて口を嚙む。

市岡はしばらく窓の外を眺めていたが、やがて気づいたように香苗のほうを振り向いた。

「なんだ香苗さん、何か言いたいことでもあるのか？」

「え？ いえ、別に……」

ふいに店内の音楽が途切れて静寂が訪れる。

香苗も言葉を止めて、そのまま数秒間の沈黙が続いた。

やがて次の曲が始まると、市岡はあらためて口を開いた。

「また学校で何かあったのか？ 前みたいに、クラスの誰かに虐められているのか？」

「いえ、それはもうありません。短大はいいところです。友達も何人かできました」

「じゃあ……」

「それより、今日はどうして私を呼んだんですか？」

香苗は話を遮さへぎって尋ねる。

市岡は訝あやまげな目を向けていたが、やがて小さくうなずいてスーツのポケットに手を入れた。

「渡す物があつてな。あんたが欲しがっていた物だ」

そう言つて一通の茶封筒を香苗の前に投げ置いた。

香苗は茶封筒を取ると、糊のり付けされていない口を開けて中をあらためる。

そして小さく息を呑んだ。

「これ……」

「約束したことだからな。物足りないかもしれないが」

「充分です。ありがとうございます、市岡さん」

香苗は両手で茶封筒を胸に抱いて頭を下げる。

市岡はその仕草を見つめたまま、机の下で軽く拳を握った。

「それをどう使うかは、香苗さんの勝手だ。だが親には内緒にしておくんだな」

「大丈夫です。市岡さんのご迷惑にはならないようにします」

「俺のことじゃない。あんたのために言ってるんだ」

市岡は節ふしくれ立たつた手を伸ばすと香苗の白い頬に触れる。

3

香苗は思わず体を震わせたが、避けようとはせず、そのまま市岡の顔をじっと見つめた。

「だけど、香苗さん。忘れるなよ。俺はいつもあんたを見ているからな」

市岡は黄色く濁った目を向けて、低い声で伝える。

香苗は黙って唇を嚙むと、静かに目を伏せてうなずいた。

胸に押し付けた茶封筒が、かざりと音を立てた。

自分を中心に世界が動いていると思うことがある。

この世に存在するのは自分だけで、あとは世界も人も自分のために作られたものに過ぎない。

だから楽しい時は何もかもが美しく輝いて見えて、暗い時は世界がまるで滅亡寸前の闇に包まれたように思ってしまう。

王様である自分が、世界に影響を与えているからだ。

でもそれは、自分が感情を通して世界を体験しているから、そう思うだけだ。外部から情報を得る自分の五感が、浮かれているか、落ち込んでいるかに過ぎない。冷静になって統計でも取れば、何も不自然なところはないと分かる。自分が世界に与える影響は、針の先より小さな物で、もし存在しなくなつたとしても、世界はほとんど何も変わらないと知るだろう。

それに気づくと、人は大人になるという。

自分もまた世界を構成する一員に過ぎず、毎朝の電車から放出される大勢の一人に過ぎない。

根拠のない万能感を捨て去り、身の程をわきまえば、そこに紛れる矮小な自分の姿が見えてくるだろう。

大人になるとは、一人前の人間になること。

決して二人前や百人前ではないと思ひ知ることだ。

だが、それを知ったところで、結局は自分が世界の王様であることには変わらない。感情を通して体験している限り、その意識からは逃れられないのだ。

世界に何の影響力も及ぼさない王様。

そこにはただ、何も変えられないという絶望的な無力感が残るだけだ。

市岡守琉は市立病院からバスに乗って、自宅のあるマンションへと帰る。

途中から雨が降り始めるのを車窓から眺めていた。

風もなく、音もほとんど響かない静かな雨。

町は霧がかかったように薄ぼんやりとしていた。

住処は駅を中心とした町のやや外れに建つ、青白い外観のタワーマンションにあった。

正面玄関を通って一階のエントランスホールへと入り、エレベーター前で呼び出しボタンを押す。

病院の物よりも早い動きで箱が到着し、病院の物よりも狭いドアから中へと入った。

ベージュ色の床と、グレー色の保護カーペットが壁面に貼られた空間。

慣れた動作でドア右手の操作盤から『6』と表示されたボタンを押す。

ドアが閉まるなり、押し上げられる感覚とともに箱が上昇した。

円柱形のマンションは二階から外周に沿って部屋が連なり、中央は地上から一直線の吹き抜けになっていた。

二〇階建てで部屋数は一二八戸、間取りは守疏の住む六階の一室で2LDK、上層階では3LDKが設けられている。

二一歳の独身男性にしては、ややそぐわない広い家に住んでいた。

——市岡君。いい物件があるぞ。

三年前に勤務先の社長から野太い声でそう薦められた。

高校を卒業後、町にある小さな不動産会社に勤めている。

大手ではなく、二〇名ほどの社員が働く、地域密着型の店舗だった。

——うちが管理している物件のひとつに空室ができた。売りに出してもいいが、住んでみる気はないか？

不動産会社で働いているのだから、自分でも実際に住居の契約や、諸々の手続きを含めた単身者の生活を体験したほうがいい。

客の相談にも親身になって応じられるだろうという話だった。

もちろん理由はそれだけではない。

マンションは近代的な作りだが、築年数は二四年を過ぎて老朽化が目立ち始めていた。今時、玄関のエントランスホールにはオートロックもなく、バリアフリーも考慮されていない。

部屋は水回りにやや難がある上に、窓が全て西向きのため、朝は暗く夕方には強烈な西日が射し込むというデメリットもある。

要するに、一般客には家賃を下げてでも売り辛い物件だった。

だが、若い男にとっては、その程度の不便は問題なかった。

オートロックもバリアフリーも不要で、水回りも修繕できるレベルだった。

平日は朝から夜まで仕事に出ているので、陽当たりも気にはならない。

会社から家賃の補助金も出るとなると、むしろかなり良い条件の物件だった。

唯一気になったのは、やはり一人で住むには広い間取りだ。

しかし古風で剛毅な性格の社長は、男が住むならこれくらいがいいと譲らなかった。

——家は城だ！ 狭い家だと男の器も小さくなる。いずれ結婚すれば嫁さんと一緒に住めるんだぞ。

なるほど、とは思わなかったが、その前向きな主張に乗せられて、結局そのまま賃貸契約を結んだ。

何よりも大きな動機は、早く実家から出て行きたかったからだ。

以来三年間、守疏は一人暮らしを続けている。

結婚はおろか、家に招く女性もない。

何度か付き合ったが長続きせず、仕事が忙しいこともあって、今は独り身に満足していた。
広い部屋を持って余し、さほど料理もしないキッチンには包丁とまな板と一揃いの食器しかない。
そして部屋の一つは、日々着実に物置へと変わりつつあった。

4

エレベーターのドアが開いて六階に到着する。

降りた先では廊下が左右に伸びており、その向こうには、広大な吹き抜けを取り囲むように各部屋のドアが並んでいた。

人の姿はなく、寂しい廃墟のように静かで無機質な光景が広がっている。

しかし、耳を澄ませば各部屋から、人の話し声や物音などの生活音が廊下にまで響いていた。

マンションの入居者は夫婦二人か、子供や親を含めた三、四人の世帯がほとんどだ。単身者は自分を含めてごく僅かしかない。

勤務先の会社が管理している物件なので、各家庭の構成は大体把握していた。

家は609号室で、エレベーターから左回りに廊下を進んで八番目のドアにある。

『4』は『死』に繋がるという理由で604号室は省かれているので、八つ目の家が609号室となっていた。

マンションによっては『9』も『苦』に繋がるので省かれる場合もあるが、ここではそのまま設けられている。

だが数字を気にして入居を避けられることも少なからずあるらしく、守琉がすんなり入居できたのはその辺りに理由があった。

吹き抜けの空間を右手に廊下を歩く。

そちら側には胸の辺りまである手摺りつきのガラス柵が設けられていた。

吹き抜けは遙か上の屋上まで開口しているので、降り出した雨が一階の中庭を濡らし始めている。

中庭には名前の知らない常緑樹の高い木とベンチが並んでいた。

レイアウトにはマンションデザイナーのこだわりがあったらしいが、各階の廊下から見下ろせる場所にあるせいか、憩いの場に用いる入居者は誰もいなかった。

次第に強まる雨音に耳を傾けながら、ぼんやりと今後のことを想像する。

今日の手定めではなく、病院に担ぎ込まれた父とのこれからだつた。

入院生活はまだしばらくは続くだろうから、自宅と病院との往復、実家も含めた三点を歩き来する日々になる。

昔のように父の指示で動き回り、父の下着を洗濯する生活。

忙しくなるが、それは大して苦ではない。

問題はその後、退院後の父とどう付き合っていくかだ。

過度の飲酒で倒れた以上、もう一人にしておくことはできない。

アルコール依存症の患者は孤独な日常生活を送っている場合が多い。

飲まないように、控えるように、息子さんも日頃から気をつけて見守って欲しいと、

病院の医師からも居酒屋の店主からも言われていた。

三年ぶりに実家へと戻るか、父をこのマンションに呼ぶか。

いずれにせよ、再び父と一緒に暮らすことになるだろう。

あの頃と同じ二人暮らしに。

無関心な態度とともに、お互いの本心と、大きな疑問から目を背け続ける日常に……

その時――

頭上の遙か遠くから鋭い声^{ほろ}が耳に届いた。

小犬が吠えたような短く甲高い音^{かんだか}。

反射的に雨の降りしきる吹き抜けのほうを振り向く。

その目の前を、逆さまになった女が通り過ぎた。

――え？

パンツという大きな音が、今度は足下の遙か遠くから聞こえた。

体が彫像のように硬直して身動きが取れず、大きく見開いた目は、何もない吹き抜けの空間だけを見つめていた。

今、何を見た？ 何が起きた？

止まっていた思考がゆっくりと動き出す。

悩んでいた将来への心配は一瞬のうちに霧散^{むさん}し、今ある全てに神経が集中していた。

吹き抜けのほうに足を向けて、ガラス柵の縁に両手を掛けて、階下を覗き込むように首を伸ばす。

おそらく数秒間の動作が、ひどくゆっくりに感じられた。

中庭のほぼ中央には、うつ伏せに倒れた女の姿があった。

5

生温い雨がシャワーのように後頭部を打ち続ける。

女は水色のカーディガンと花柄のロングカートを穿き、小振りのストローバッグが左手からやや離れたところに落ちている。

顔は見えないが、服装から若者だと分かる。長い髪が扇状に広がっていた。

六階からでは床に落ちた小さな人形のようにも見えて、むごたらしい様子までは確認できない。

しかしこの高さから落ちれば、もうどう考えても無事では済まないだろう。

耳の奥では、たった今聞いた音が何度も繰り返されている。

ドンツではなく、パンツ。

重い衝撃音ではなく、弾けるような破裂音。

そんな音が鳴るのかと知って身震いした。

六階のガラス柵の下には、幅一メートルほどの支柱にナイロン製の網を張った転落防止ネットが廊下に沿って設けられている。

ネットはマンションの二階、六階、一階、一五階に取りつけられていた。

元々はガラス柵だけの転落防止措置だったが、一〇年ほど前に高層階にいた子どもがボールを落として、それがちょうど中庭を歩いていた住人に当たり怪我をさせた事故があったらしい。

それで、一応の安全対策として転落防止ネットが中途半端に設置された、とマンションの記録にはあった。

だがそれも今回は役に立たなかったようだ。

六階の守疏も、一階の女も、微動だにしなかった。落ちた、人が落ちた。痛いほど胸に押し付けたガラス柵には十分な高さがあり、大人でも誤って落ちるとは考えられない。

伸ばした首をそのまま持ち上げて、上の階に目を向ける。

見える範囲ではガラスが割れたり、柵自体が壊れたりした様子もなかった。

——自殺か？

首を戻して正面を見据える。

数分前、もしかすると数十秒前、確かに女が落下する姿を目撃した。

いや、それだけではない。

一瞬の出来事をカメラで捉えたように、女の大きく開いた目と、驚いたような表情まで脳裏に焼きついていた。

マンションの外から救急車のサイレンが聞こえてくる。

誰かが通報したのかと思ったが、いくらなんでも早過ぎる。

案の定、サイレンはそのまま遠ざかっていった。

——何かがおかしい。

女は廊下の周囲に張られた転落防止ネットにも掛からず、吹き抜けのほぼ中央を落下していた。

ということは、ガラス柵をまたいだあと、中央に向かって大きくジャンプしたか、あるいは転落防止ネットを渡って、その縁から飛び降りたかに違いない。

だから事故ではなく、自殺としか思えなかった。

しかし、転落直後に見た女の顔は、なぜか予想外の事態に驚いたような表情だった。目も口も大きく開いて、信じられないといった風に見えた。

しかも、その顔が上下逆さまになって通り過ぎた。

女は何十メートルも下の地面に向かって、まるで水泳選手のように頭から飛び込んだのだ。

さらに、倒れた女の側には、彼女の物らしいバッグも一緒に落ちていた。

飛び降り自殺といえ、脱いだ靴の下に遺書を添えて、裸足で手を合わせてから臨むのが定番だ。

そんなルールに従う必要もないが、バッグ片手に死出の旅路へと向かうだろうか？自ら命を断つとすれば、あまりにも不自然なことが多い気がした。

——事故でもなく、自殺でもないとするれば？
ゆつくりと顔を上げて、再び中庭を見つめる。
女の体を縁取るように赤い血溜まりが広がり始めていた。
上の階にも下の階にも人はいない。
首の辺りでやけに大きく聞こえる脈拍と、無意識に震え続ける足と、降り続ける雨粒
以外には何も動くものはなかった。

——どうして放っておいたんだ！

頭の中で声が響く。

ベッドの上で枯れ木のように横たわる父の姿。

見捨てた過去が、取り返しのつかない後悔となつて責め立てた。

女が事故か自殺かと考えている場合ではない。

今は一刻も早く中庭へ行つて様子を見に行くべきだろう。

そしてまだ息があるなら、その可能性は低いだろうが、できる限りの方法で助けなければならぬ。

そこに迷いがあつてはならなかった。

そう決意するなり、勢いよくガラス柵から身を離す。

そして踵を返して廊下を戻り、エレベーターへと飛び込んだ。

操作盤から『1』のボタンを押すと、機械に向かって急かすように足踏みを繰り返す。
ぐぐぐつと、重みのある動きでドアが閉まり、がくんと音を立てて箱の降下が始まった。

巨大な力で上から押さえつけられるような感覚がする。

女が誰かは知らない。

どんな事情があつたかも知らない。

それでも、とにかく無事であつて欲しい。

目撃者の責任として、未来に後悔しないために、ただ純粋にそう願ひ続けて到着を待った。

ちらりと覗いた腕時計の針は、午後四時過ぎを示していた。

「香苗！」

突然、夜道で背後から男に腕を掴まれて、水尾香苗は振り返る。

目線の先には、太眉で精悍な顔つきの男が、訝しげな目を向けていた。

「あ……お父さん」

香苗はそう言うのと立ち止まって肩の力を抜く。

代わりに両足に力を入れて、座り込みそうになるのを踏み留まった。

寒風の吹きすさぶ二月中旬の土曜日、最寄り駅から自宅へと帰る途中。

道は自動車一台がや々と通れるくらいの幅しかなく、両側には家々の塀が壁となつて

立ち塞がっていた。

外灯も少なく、夜九時を過ぎると車も人の通りもほとんどない。

耳に栓をされたような静けさの中、二人の声だけが響いていた。

「どうしたんだ？ 香苗。そんなに怯えた顔をして」

「ううん……いきなり腕を掴まれたから、びつくりしただけ」

「いきなり？ さつきから声をかけていたじゃないか。気がつかなかったのか？」

父はグレーのスーツにベージュのコートを着て、大きめのビジネスバッグを肩から提げている。

保険外交員なので土曜日に出勤することも多かった。

「お父さんも、今帰り？ 一緒の電車だったのかな？」

「そうみたいだな。香苗は遊びに出かけていたのか？」

「それよりお父さん、途中でおかしな人に会わなかった？」

「おかしな人？ いや、誰にも会わなかったけど。どういうことだ？」

「今日ずっと、誰かに後をつけられていた気がするの」

「何だつて？」

父は娘の話の聞こえなり素早く後方に目を向ける。

しかし暗い一直線の道は、遠くの交差点まで誰の姿も見当たらなかった。

「……それで、お父さんが腕を掴むまで振り返らなかったのか」

「知らない人が追いかけてきたのかと思って」

香苗はうつむいて地面を見つめたまま、コートのポケットに入れた両手を腹の前で重ね合わせる。

「ひどいな。お父さんを知らない人と間違えるなんて」

「お父さんこそ、よく後ろ姿だけを見て私だって分かったね。こんなに暗いのに」

「当たり前だ。香苗は町中でお父さんの後ろ姿を見ても気づかないのかい？」

「ちよつと、自信ないかも」

「おいおい……もうちよつとお父さんにも関心を持って欲しいな」

「ごめんなさい……」

「え？ 冗談だぞ、香苗」

香苗の暗い声を聞いて父は大袈裟におどける。

しかし娘の表情が変わらないのを見るとすぐに笑顔を止めた。

「香苗、ずつと誰かに後をつけられていたって言ったね。どんな奴だったんだ？」

「……灰色のニット帽を被って、緑色のジャンパーを着た男の人だった。下は黒色か青色の、デニムみたいなのを穿いていたと思う」

「顔は？」

「よく分からない。眼鏡を掛けて、白い大きなマスクをしていたと思う。私もあんまりジロジロ見られなかったから」

「ふうん、そいつに何かされたのか？」

「別に何も。でも遠くからじつとこつちを見ている感じだった。お昼に同じ電車の車内にいるのに気づいて、そのあと駅で友達を待っている時も、近くにいるのを見つけたの」「どこの駅だ？」

「もとやま本山駅。フルトピアに行っていたから」

フルトピアは駅に隣接する複合施設の名称だ。広大な建物にはブランドショップや飲食店街が入り、高層オフィスビルやマンションにも隣接している。

駅の地下街とも連結しており、平日休日を問わず人通りの絶えない一帯だった。

「あそこは広いだろ。同じ駅で降りて、同じように人を待っている奴なんて他にも沢山いたんじゃないか？」

「だけど、そのあと何度も見かけたの。あつちでも、こつちでも。気がつくといつも同じような距離で立っていたんだよ。女物の服を売っている店の前でも立っていて、まるで奥さんか彼女を待っているようなふりをしていたの」

「知り合いじゃないのか？ 見覚えのある顔だったとか」

「そんなにしつかりとは見なかったけど、友達や昔のクラスメイトにそんな人はいなかった。格好も野暮やぼつたくて、もつと年上としか思えなかった」

香苗は少し落ち着きを取り戻したこともあり、歩きながらやや声を大きくして訴える。父は眉間に皺しわを寄せつつ、黙って娘の顔を見つめていた。

「それからご飯を食べに行つたけど、お店を出たところにもいたの。柱の陰になつてよく見えなかったけど、きつと同じ人だと思う」

「一緒にいた友達にも話したのか？」

「言ったよ。でも気にしないほうがいいとか、知らないふりをしたほうがいいって。うつかり目を合わせたら追いかけて来るからって」

「そんな奴なら、目が合ったら逆に気まずくなって逃げ出すよ。いや、でも関わらないほうがいいぞ」

「それで、帰りに友達と別れて駅のホームで待っていたら、やつぱりいたの。しかも同じ電車に乗ったんだよ」

「じゃあ車内で顔を合わせたのか？」

「うん。私は二両目だったけど、その人は三両目に乗ったと思う」

「お父さんはどうだったかな。後ろのほうだったから、六両目くらいか」

「家まで付いて来たらどうしようと思って。それでもう気づいていないふりをして帰ってきたの」

「だから後ろから呼んでも気がつかなかったのか。頭の中で耳を塞いでいたんだね」

父は納得して穏やかな口調で返す。

香苗は唇を囁んで小さくうなずいた。

「おかしな奴に付きまとわれたな。でも友達の間で通る、気にしないほうがいい。さつさと忘れるんだな」

「でも、何か理由があったんじゃないかな？ だって本当に、付かず離れずにいるんだ

よ。何の意味があるの？」

「香苗が可愛いからだよ。見つめていたかったんだよ」

父は微笑を浮かべて娘に伝える。

しかし香苗は顔を曇らせて首を振った。

「本当の話だよ。好きな女優やアイドルを追いかけているみたいなものだ。でも自分から話しかける勇気もないから、ただ見ていることしかできなかった。そういう奴もいるんだよ」

「……そんなこと言われても」

「だから放っておくしかないんだよ。どうせ二度と会わないんだ。考えるだけ無駄だよ。家に帰ってゆっくり休め」

「でも、今日だけじゃないんだよ。前から何度も、同じ人を見ているの」

香苗の言葉に父は目を丸くする。

ぞっとするほど冷たい風が二人の間を通り抜けた。

「大体は学校帰りの夕方や、今日みたいに休みの日によく現れるの。服装は違うけど、いつも遠くから、じいっと立っていて私のあとを付けてくるの」

「それは、本当に同じ奴なのか？ 遠目から見ても、服装も違ってれば分からないんじゃないのか？」

「それはそうだけど、でも気配が同じような気がするの。本人は隠しているつもりだろうけど、距離の取り方とか立ち姿までは変えられないと思う。お父さんが後ろから見ても私だって分かるのも、そういうことでしょ？ 髪型や服装だけじゃないよね？」

「いつから付きまとわれるようになったんだ？ 他に何か、気づいたことはあるか？」
 「はつきりと感じるようになったのは去年の一二月くらいかな。その前から何か見られているような気はしていたけど。他に気づいたことは何も。私もしっかりと見ておけば良かったんだけど」

「いや、見ないほうがいい。何も知らなければそれでいいんだ」

父は深刻な顔つきになって否定する。

二人が入居するマンションはもう目の前だった。

「分かったよ、香苗。大丈夫だ。お父さんがなんとかするよ」

「警察に通報するの？」

「警察はあてにならない。実害がなければまともに動かないんだ。香苗にボディガードを付けてくれるわけでもないし、気をつけてくださいと言われるだけだよ」

「そうだよね。じゃあ、どうするの？」

「お父さんがそいつを捕まえてやる」

「そんなの、危なくない？」

「おいおい、お父さんを甘く見るなよ。娘に付きまとうストーカーなんて目じゃないさ」

父は大袈裟な笑顔を向ける。

「だから、香苗はもう心配するな。それと、もしまたそいつを見かけても無視するんだ。間違っても近づいたり声をかけようとしたりするんじゃないよ。かえって警戒されかねないからね」

「分かった、そうする。それと、できればお母さんには内緒にしておいて欲しい」

「そうだな。余計な心配をかけるだろうしな」

父は了解すると腕を伸ばして娘の細い肩を強く抱いた。

「よし、もう家に入ろう。大丈夫だよ。お父さんに任せておけ」

父の言葉に香苗は黙ってうなずいた。

7

人は常に頭の中で、予定を立てて行動している。

学校で勉強をする予定、会社で働く予定、コンビニで買い物をする予定、これから牛乳を飲む予定。

ありふれた日常でも、普段通りの行動でも、必ず結果を意識している。

その意識できる結果こそが、予定というものだ。

予定とは、先取りした未来の記憶だ。

人は過去に立てた予定に従い、未来に向かって、現在を生きている。

未来の予定は近づくほどリアルになり、やがて現在と同一になる。

飛び石が見えていないと、急流の川は渡れない。

すなわち行き先にある足場は、現在にある未来の予定だ。

人はこれから起きることを、起きる前から知っている。

だから、稀まれに全く予定外の事態に直面すると、現在を見失って身動きが取れなくなるのだ。

市岡守琉はエレベーターのドアが開くなり、すぐさま箱から飛び出し一步踏み出す。しかし次の瞬間、なぜか足はぴたりと止まり、その場から動けなくなってしまった。

——何をするんだっけ？

肩透かしを食らったような戸惑いを覚える。

足を止めたのは、思いがけない疑問のせいだった。

目の前では廊下が左右に伸びており、その向こうには、広大な吹き抜けを取り囲むように、各部屋のドアが並んでいる。

はつきりと分かるのは、一階とは異なる景色ということだった。

一階ならエレベーターの前には、正面玄関に繋がるエントランスホールがあり、裏手には中庭へと繋がる巨大なガラス戸が設けられている。

そう、中庭へ転落した女の様子を見るために、慌ててエレベーターに乗って六階から一階へと下りたはずだった。

ところが、到着した先は六階と変わらない景色だった。

つまりエレベーターが二階から五階までのどこかで止まってドアが開いたので、それに釣られて箱から出てしまったようだ。

さすがに操作盤の『1』ボタンを押し間違えることはない。

降下途中に住人が呼び出しボタンを押ししたのである。

しかし周辺で待っている人はいない。

——誰かが押し間違えたあとに立ち去ったのか？

——エレベーター自体が故障したのか？

立ち読みサンプル はここまで